

# 保育者養成における「健康系」授業の模擬保育指導方法の検討

－先生役、幼児役、観察役の学びの傾向に着目して－

## Examination regarding teaching method of simulated lesson for the “Health” class in child care training

－ Focus on the trend of learning from the role in teacher, infant, and observer －

田 村 元 延

TAMURA Motonobu

キーワード：模擬保育、健康系授業、保育者養成、テキストマイニング

Keywords: Simulated lesson, “Health” class, Child care training, Text mining

本研究では、先生役、幼児役、観察役を経験する模擬保育を取り入れた健康系授業で得た自由記述を対象にテキストマイニング分析を行い、学生の学びの傾向を読み取ることで、模擬保育実践の実態把握及び改善のための知見を得ることを目的とした。その結果、先生役では、「遊び」、幼児役では「子ども」、観察役では、「見る」を中心としたキーワードが抽出され、各役割の経験を通して、学生自らの保育や実践を考える学びの傾向が読み取れた。特に観察役の学生は、冷静に、客観的に「他者の実践を観ることで学ぶ」体験をしている傾向がわかり、今後、俯瞰的に実践を観察する機会を増やすことで、模擬保育を展開していく指導上の知見を得ることができた。

### I. 背景及び目的

平成 28 年 8 月より教員養成系大学において、共通的な資質能力の修得を目指す教育課程コアカリキュラム内容の検討がなされている。その中で幼稚園教諭免許の取得課程においては、領域及び保育内容の指導法に関する科目として「保育内容の指導方法（情報機器及び教材の活用を含む）」が提示されている。主に各領域の理解を深めると共に具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身につけることが目標とされる（文部科学省、2017）。このことから、より一層、保育者を目指す学生への保育実践力の向上を目指した授業づくりが求められるといえる。

保育実践力の向上を目指した取り組みとして、これまで、多くの保育者養成系の大学において授業や実習指導の中で模擬保育（模擬実践）が行われている。その効果として、保育を計画・実践する力に加え、保育理論の理解、省察力の向上、子どもの心情理解、保育観・子ども観の形成にも寄与することが先行研究で報告されている（松山；2009、中山ら、2013；上村、2013、富貴田ら、2017）。

こうした模擬保育では、一般的に先生及び幼児といった役割を決め、ロールプレイング的に実践を行い、反省会を含めて相互に学び合う形で実施されている。これに加え、先生役、幼児役以外にも実践を外から観察する参観者を設けたり（笠原ら、2016）、模擬保育の様子をビデオカメラで撮影し、記録映像を基にビデオカンファレンスを実施するなど（上村、2010）、他者や自己の実践を客観的に捉え、振り返る実践も行われている。

こうした先行研究を参考に、これまで筆者自身も健康系授業において、先生役、幼児役、観察役といった様々な視点から学びを深めるための模擬保育を実施してきた。その中で挙げられる課題としては、先生役、幼児役、観察役を経験した学生は、各視点でどのようなことを学んでいるのか「学びの傾向」を明らかにすることである。そして、その内容を把握し、知見として蓄積していくことで指導方法の改善を図ることである。

模擬保育において「学生の学び」を明らかにする方法として、これまで、保育者養成及び小学校教員養成課程でも自由記述形式の回答文を対象に、テキストマイニング分析を用いた研究が行われてきている（松山、2010；角南ら、2017）。学生の自由記述を対象とした研究では、膨大な文章を扱うため、主要な「学びの傾向」を把握することが困難である。しかし、テキストマイニング分析では、テキストデータを得ることができれば、主要な「学びの傾向」を可視化でき、かつ具体的な感想記述を抽出することが容易となる。

そこで、本研究では、先生役、幼児役、観察役を経験する模擬保育を取り入れた健康系授業を受講した学生の自由記述を対象に、テキストマイニング分析を用いて「先生役、幼児役、観察役の学びの傾向」を読み取ることで、授業での模擬保育実践の実態及び今後の改善を行うための知見を得ることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査方法

#### 1) 授業における模擬保育の実施と実際

模擬保育は、平成 29 年度前期 T 大学短期大学部保育科、「子どもの運動あそび」授業内で 3 クラス対象に行った。実施について、3～4 人組（1 クラス辺り 9～10 グループ構成）を編成し、第 8～9 回目の授業 2 回分を模擬保育の計画（教材研究、指導案の作成など）に充てた。その後、授業 10～14 回目の授業 5 回分で、どのグループも先生役（1 回）、観察役（1 回）、幼児役（8～9 回）を必ず体験できるように実施した。

図 1 に 1 クラス 10 グループ構成の実施の流れを示す。模擬保育は 1 回の授業内で 2 グループが 20 分の実践を行い（授業 10 回目の場合、実践 1 の先生役：A、実践 2 の先生役：B）、次回の実践グループが観察役を担った（授業 10 回目の場合、実践 1 の観察役：C、

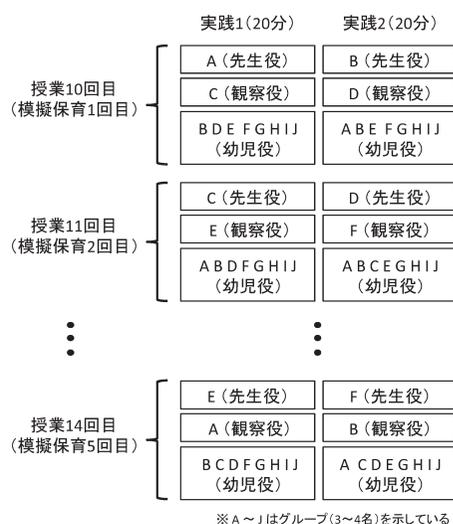


Figure 1 the flow of simulated lesson (10 groups per class)

実践2の観察役：D)。それ以外のグループは、幼児役として参加した。

先生役に対する指導の留意点としては、授業担当者である筆者が独自に設けた表1に示す観点に即し、自分たちが計画した遊びを実践するように促した。幼児役に対しては、設定された対象年齢をイメージし、表1の観点意識しながら参加するように促した。観察役は、先生役の指導案を見ながら筆者と共に実践の観察を行なった。その際、筆者は、各模擬保育場面において、適宜、表1の観点で学生の気づきを促す形で指導を行なった。

実際の20分間の模擬保育では、ボール、縄、フラフープなどの用具や跳び箱、平均台、マットなどの器具を用いた遊びの中で自由に用具や器具に関わって遊ぶ時間や全員でリレー、競争、ゲーム時間が設定されていた。

## 2) アンケートの対象、実施及び回収

対象は、模擬保育において先生役、観察役、幼児役を経験した3クラス（各クラス32～

33名）の学生97名（男子：5名、女子：92名）を対象とした。アンケートは、平成29年7月18、26、28日に「子どもの運動あそび」授業15回目のまとめで、「模擬保育のふりかえり」として、以下に示す3つの質問に対し、自由記述で回答させる形で行なった。

### (1) アンケートの質問内容

- ① 模擬保育で保育者として実践を行なって感じたこと・学んだこと
- ② 模擬保育で幼児役として実践を受けて感じたこと・学んだこと
- ③ 模擬保育で観察者として実践を観察して感じたこと・学んだこと

アンケートは、回答後その場で回収した。学生には、アンケートで得た自由記述を個人が特定されないよう扱うことに加え、本研究目的以外には使用しないことを口頭で説明し、同意を得た。なお、本研究は、常葉大学短期大学部研究倫理委員会の審査による承認を得て行なわれた。

## 2. 分析方法

### 1) テキストマイニング分析におけるキーワード及び文章の抽出

回収したアンケートの自由記述について、質問ごとにエクセル（Microsoft）に打ち込み文字データ化した。その後、計量テキスト分析ソフト KH Coder（樋口、2014）を用い、先生役、幼児役、観察役の共起ネットワークの作成を行なった。その際、語と語が共に起こる回数中心性の高いキーワードを抽出し、そのキーワードと繋がりのある語に着目した。回数中心性とは、各語のもつ関係の多寡によって、その語のネットワーク内での重要性を評価するものである。すなわち、他の語と多く繋がっている程、中心性が高いと評価される。こうしたキーワードは、ネットワーク内では濃い色で表示される。図2を例にあげると、先生役の共起ネットワークで最も語と語の繋がりが多いものは「遊び」である。この「遊び」を先生役のキーワードとして抽出し、それに繋がる「自由」「次」「遊ぶ」「楽しい」などの12語に着目した。

Table 1 the perspective of practice and observation in simulated lesson

1. 計画の観点
  - 1) 保育者のねがい(ねらい)及び5領域と遊び内容の繋がり
  - 2) 保育者のねがい(ねらい)と遊びの展開・環境構成
2. 実践の観点
  - 1) 保育者のねがい(ねらい)と援助
  - 2) 安全への配慮
  - 3) 話の伝え方(わかりやすさ)
  - 4) 話の聞き取りやすさ・語りかけ方(声量、表現)
  - 5) 立ち位置、かかわり
  - 6) 活動全体の雰囲気・流れ

## 2) 記述引用

共起ネットワーク次数中心性において抽出されたキーワード及びキーワードと繋がりのある語について、先生役、幼児役、観察役の記述の中から文章を抽出した。その後、本研究では先生役、幼児役、観察者役の体験が特徴的に表されている 1 文を筆者が選択し、引用した。本研究では、このような手続きを経て抽出した文章に、実際の実践場面における学生の様子も加味した上で「先生役、幼児役、観察役学びの傾向」を読み取ることが試みた。

## Ⅲ. 結果及び考察

### 1. 先生役の「学びの傾向」

図 2 は、先生役の記述から抽出された語の共起ネットワークを示したものである。最も多くの語と繋がりがあつた語は「遊び」であった。「遊び」と繋がりのある語は、「自由」「次」「遊ぶ」「楽しい」「大切」「計画」「学ぶ」「考える」「子ども」「感じる」「時間」「説明」の 12 語であった。

これらの語が用いられている引用文を抽出し、特徴的な文章を表 2 に示した。文章は、主に「子どもに合わせた遊びを考えること（文 1）」「保育者の役割に関すること（文 2）」「子どもの主体性、子ども中心に遊びを展開、発展させること（文 3、4、5、6、7、8、9、10、11、14）」「自由に遊ぶ時間を設定すること（文 12、13）」「保育者が子どもの遊びを阻害してしまうこと（文 15）」「保育者の遊びの説明に関すること（文 16、17、18）」といった先生役の学びの傾向が読み取れた。

「子どもに合わせた遊びを考えること（文 1）」について、模擬保育の計画段階で、学生自身が現在持っている幼児のイメージをもとに対象年齢の設定を含めて教材研究を行なった。しかし、実際の実践場面では、幼児役の学生でも実施することが難しい運動遊びの内容が扱われており、実践中に学生からも「難しい」「できない」との声が聞かれた。先生役の学生は、こうした幼児役の反応を見て、子どもに合わせた遊びを考えることの大切さを学んだと推察する。

「保育者の役割に関すること（文 2）」については、模擬保育では、表 1 で示した「模擬保育の実践・観察の観点」をもとに、保育者のねがい（ねらい）を持つことに重点を置いた指導を行なった。この活動で「何を子どもに経験してもらいたいのか」、その上で「どのような遊びの内容、遊びの展開・環境を設定するのか」といった観点から実践を行なったことで、子どもに伝えたいことを持つ保育者の役割に気づいたのではないと思われる。

「子どもの主体性、子ども中心に遊びを展開、発展させること（文 3、4、5、6、7、8、9、10、11、14）」では、実践において、多くのグループが立案した指導計画通りに時間や活動内容を進行しようとしていた。この状況は実践場面において、幼児役の学生が自分なりに遊

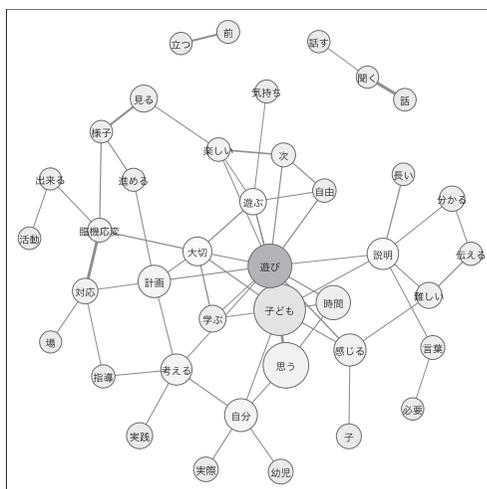


Figure 2 the network of co-occurrence in teacher (order centrality)

Table 2 the quotations in teacher (focusing on the 12 words co-occurring with the keyword “play”)

キーワード	共起語	文	引用文
遊び	自由 次 遊ぶ 楽しい 大切 計画 学ぶ 考える 子ども 感じる 時間 説明	1	自分たちはできると思った遊びでも年齢によっては難しくなったりしたので自分達の立場ではなくてしっかりと子どもの目線に立った考え方が大事だと思いました。
		2	遊びを通して子どもに伝えなかったことをしっかりと伝えられるようにすることが保育者の1番の役割だということを感じた。
		3	子どもが楽しく遊んでいる感じだったら無理に次の遊びに行かなくても良い。
		4	子どもたちの遊びの発展のために道具+(プラス)何か違う道具をあわせるだけで子どもたちはほとんど遊びを発見し、たくさんの道具にふれ、遊びが発展していく。
		5	自由遊びで保育者が指示しなくても子どもたちが自らフラフープで遊びを展開していたため、ゲームという形にこだわらず、自由遊びを自然に広げていき、子どもたちの遊びを切らないほうが良かったと感じた。
		6	計画通りではないけれど、子どもの様子を見て、楽しそうだったらその活動の時間を増やし、その後予定していた遊びを次の日にするなど、臨機応変に対応していくのが大切なのだと分かりました。
		7	計画があるという計画を優先させてしまいたくなるけれど、あくまで中心は子どもで、計画を無理に通さず、子どもを中心に遊びを進めていければ良いのだということ学びました。
		8	計画通りに進めようと一つ一つの遊びを短くしたり時間を見ながら、かつ子ども達の遊びの様子をみつめていく大変さを感じた。
		9	計画通りでなくても、子ども主体の遊びが大切だと思いました。
		10	流れや計画にとらわれすぎると、子どもの遊びや楽しさを切ってしまうこともあり、子どもの様子を見ながら、臨機応変に計画を変えることも必要だと感じました。
		11	もっと遊びたいとかこっちの遊びをしたいとか計画通りにならなくてもそのような子どもの声や気持ちを尊重するということを学びました。
		12	子どもたちが自由に遊ぶ時間がなくそのまま全体の遊びに移ってしまったのもっと自由に遊べる時間を作った方がいいなと思いました。
		13	子どもに素材を直接触ってもらい自由に遊ぶ時間を作ったが自由遊びがここからもっと良い方に遊びが展開するだろうという時に時間の関係で遊びを中断させてしまったのが残念だった。
		14	子どもの盛り上がりに合わせてその遊びにもっと時間をかけて十分に楽しめるようにしてあげるとよかったですと学んだ。
		15	自由に遊びをして、次の遊びをする時、子どもが楽しく遊んでいる所で笛を鳴らしてしまった時、子どもの楽しいという時間を大切にしなければならぬ保育者が、うばってしまったように感じた。
		16	遊びを遊びの間の時間が集まって説明という時間などに取ってしまい子どもたちが動いている時間がなかったと感じました。
		17	一度遊びを止めて説明するより、子どもが遊びに集中した状態を保ちながら次の遊びに行くことで子どもも楽しいとスムーズに進むことができると学びました。
		18	遊びの説明をする時に、子どもに対しての適切な言葉選びが必要だとわかった。

びを発展させていたり、遊びに夢中になっていても先生役の計画通りに進行するあまり、遊びを中断させてしまうことに繋がった。こうした状況から、先生役は、子どもが主体的に活動できる環境や子どものやりたいことができるような活動を展開する必要があるということに気づいたと推察する。また、こうした体験は、「自由に遊ぶ時間を設定すること（文12、13）」の大切さに気づくことにも繋がったのではないかと考える。幼児役の学生が主体的に活動する様子は、自由に遊んでいる時間の中で、自らで遊びを発見したり、遊びを広げたりする場面で見られた。こうした状況から、先生役は、自由に遊ぶ時間の大切さに気づき、「保育者が子どもの遊びを阻害（文15）」しないように「説明方法（文16、17、18）」なども工夫し、遊びを展開していくことに言及する記述にも繋がったと推察する。

## 2. 幼児役の「学びの傾向」

図3は、幼児役の記述から抽出された語の共起ネットワークを示したものである。最も多くの語と繋がりがあった語は「子ども」であった。「子ども」と繋がりのある語は、「大切」「思う」「感じる」「興味」「遊び」「遊ぶ」「気持ち」「保育」の8語であった。

これらの語が用いられている引用文から（表3）、幼児役の学生は、主に「子どもの目線」、「子どもの気持ち」を想像しながら遊びや先生役からの働きかけを感じながら実践に参加していることが記述から読み取れる（文5、6、7、8、9、12）。また、こうした記述に加え、「保育者の遊びの説明に関すること（文1）」「自由に遊ぶ時間を設定すること（文2）」「子ども

の興味・関心を引き出すこと（文3、4、13、14）「保育者の役割、在り方、関わり方に関すること（文10、11、15、17、18、19）」といった表2に示した先生役の記述と類似する内容も見受けられた。特に文19では、「保育者に対して自分が感じた『こうしてくれて嬉しかった、楽しかった』（中略）自分が保育者として子どものことを考えるときに意識しようと思いました」と述べていることから、幼児役の学生は、子どもの気持ちを想像しながら参加しつつ、保育者の立場からも学びを得ていることが伺えた。

「保育者の遊びの説明に関すること（文1）」「自由に遊ぶ時間を設定すること（文2）」に関する記述が挙げられたことについて、実践場面において長い時には、20分

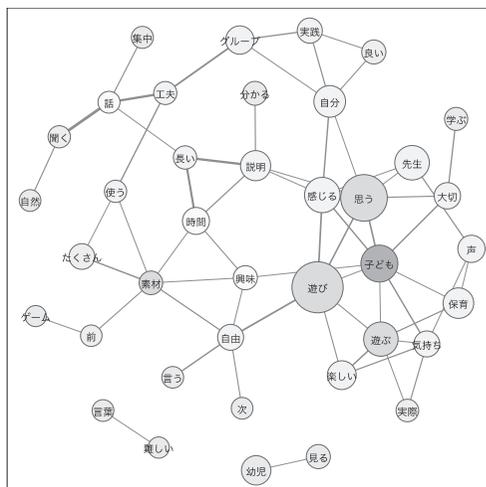


Figure 3 the network of co-occurrence in infant (order centrality)

Table 3 the quotations in infant (focusing on the 8 words co-occurring with keyword “children”)

キーワード	共起語	文	引用文
子ども	大切 思う 感じる 興味 遊ぶ 遊ぶ 気持ち 保育	1	あそびの説明をしてくれるのはいいけどあまりにも長いと私たち年齢でさえも飽きてしまったからきっと子どもたちはもっと飽きてしまうだろうからいかに短く正確に伝えられるかが大切だなと感じた。
		2	自分もそうだけど「これやりなさい」と言ってやるより、自由な時間があると子ども達同士でも学んだり一人でやって色々学んだりできると感じたので興味づけをされた後の自由の時間は大切だと思います。
		3	素材に触れ合う時間があることで、子どもの興味を引き出すことができると思った。
		4	始めから子どもが興味の持ちそうなものを環境の一部として用意してくれてあると遊びに入りやすいと感じた。
		5	幼児だったらこんなこと言わないか、こんな行動とかなど、こんな子がいてもおかしくないかななど、子どもの気持ちになって、受けていました。
		6	子どもに今から遊ぶ遊びの興味づけをする時、実際に素材に触れて自由に遊んでと言われ遊ぶど「もっとあそびたい！」という気持ちになった。
		7	子どもにとっても「やりたい」という自分で思う気持ちはとても大切だと思います。
		8	1つ1つの遊びは楽しいけれど、その1つ1つの遊びを切ってしまうと遊んでいた子どものやる気や楽しい気持ち、気持ちの高まりや盛り上がりを抑えてしまうことがわかった。
		9	遊びをしたり説明をうけたりすることで「こういう気持ちになるのかな」など子どもの気持ちを実際に感じられると思った。
		10	保育者からの声かけて遊ぶがもっと楽しくできたり気持ちがあがったりというのを実際に体験したので声かけや子どもとのコミュニケーションが大切だと学んだ。
		11	幼児役としては実践を受けて、ただ楽しんで遊ぶのではなく、ある場面で保育者にこういう風を声かけてほしいなと子どもの気持ちになって遊んだ。
		12	幼児役になって子どもがこの遊びをしたらどのような気持ちになるかが感じることができました。
		13	子どもに今から遊ぶ遊びの興味づけをする時、実際に素材に触れて自由に遊んでと言われ遊ぶど「もっとあそびたい！」という気持ちになった。
		14	その目の体調ややる気次第で遊びたいか遊びたくないかが決まるからそこを理解して興味づけできると保育者としていいなと子どもになってわかりました。
		15	実践でそのグループの願いやねらいが分かり、保育者が意図を持つことで、子どもたちもあそびの中で自然に成長していくと思う。
		16	自分が子どもになったつもりで実践してみると純粋に感じることや保育者役の時には気づけなかったところがあって、「子どもはこんな風に考えるかな?」「ここはこうするとっと良くなりそう!」ということに気が付き、楽しかったし危険を察知するのに役立ちました。
		17	子どもの立場で考えると保育者が良かれと思ってやっていることも、子どもにとってはそうではないこともあると分かった。
		18	幼児役になると、保育者役のときには気づけなかった子どもにとって危険な場面や保育者に声をかけてほしい場面に遭遇した。
		19	保育者に対して自分が感じた「こうしてくれて嬉しかった、楽しかった」「もっとこうして欲しかった...」という点は自分が保育者として子どものことを考える時に意識しようと思いました。



「保育者の意図や遊びの環境、展開に関すること（文 3、10、13、19、23、25、26、28、29）」では、「保育者のねがいがどういふところにあるのか（文 20）」「客観的に保育者のねらいを見ることができ（文 23）」といった記述が挙げられており、観察役の学生は、先生役のねがい（ねらい）を捉えながら実践を観察していたことが伺える。これは、先生役の指導案を手元に置いて観察を行なったことで、常に先生役のねがい（ねらい）と実践内容を確認しながら、実践の流れ把握することができたためと推察する。

「他者の実践から見ての気づき、学びに関すること（文 4、9、11、17、22、27）」では、

Table 4 the quotations in observer (focusing on the 13 words co-occurring with the keyword “see”)

キーワード	共起語	文	引用文
見る	観察 実践 幼児 自分 気 客観 全体 外 遊び 子ども 保育 思う 先生	1	幼児役とはまた違う視点で見られて、観察者だと保育者の動きと共に幼児役の反応も見られるので、「この子は遊びに飽きちゃってるな」などの部分も感じられた。
		2	観察者として、外から全体を見てみると、もう少し、保育者がバラバラに位置していても良いのかなと思ったり、困っている子がいた時に、あの子のごとくに保育者が行ってほしいと思ったりしました。
		3	外から見ることで、危険そうところがわかったり、ねがいなどを知らずと観察すると、「ここでこういうところで達成しているな」などリアルタイムで比べたり学ぶことができました。
		4	観察者としてみる事で「〇〇先生の言葉がけ行動すごいな！！」と思ったり、今は「〇〇やった方が良いのかな」など良い面も、もっと良い方がいいなと思った面も見れて、その中自分がやる時は気を付けなさい！と人の実践を見て自分の成長が出来たと少し思った。
		5	幼児役、保育者役だとしても見える範囲が狭くなりがちだけど、観察者はより広く見る事ができるので人の実践をみる事はすごく大切だと思った。
		6	保育者が何も説明したり声をかけたりしなくても子どもは自分なりに工夫して道具・素材を使っているのがわかって、観察者の立場の時だけ気づくのではなく保育者として実践している時にも子どもの様子を見てそういう事に気づいたり、声かけをできるようにしなければならぬと感じた。
		7	先生役でもなく、幼児役でもなく、外から観察者となって冷静に見るからこそ、気づくことがたくさんありました。
		8	観察者として見ることで、保育者として実践してやっている時よりも落ちついて判断ができると思いました。
		9	客観的に見ることで、実践しているときには気付かないことに気付くことができたり、次の実践の時に気を付けたいことを考えたりすることができました。
		10	先生（指導教員）と一緒に実践をしていると、自分達が気づかない「ここを工夫できる」というところを指摘してもらえたらとても勉強になった。
		11	遊びを外から見ることによって「この場面だったらそのままにしておいた方がよい」とか「どうつなげていくんだろう」とか自分たちの実践をより良くするためにたくさん良いところを盗もうとしていて、それが学びになっていました。
		12	外から全体をみること、先生が見ていないところで幼児役が何をしているのかがよく分かっておもしろいと感じた。
		13	保育者と幼児役を同時に見ることができたのでよいところもアドバイスしたいところもたくさん見つけられるができたし、指導案を見ながらだったので幼児の時よりも「保育者のねがい」に注目して見ることができた。
		14	幼児役では気づけなかった先生の配慮や気配りが第3者から見るとよくわかりました。
		15	他者目線で見ると、「ココはこうしたらいいかも」と自分に置きかえて、冷静に判断できると思いました。
		16	保育者の言葉がけや援助のしかた1つで、子どもの遊びが展開したり、子どもが自分たちで「もっとこうしたい！」という行動や姿を見ることができました。
		17	外から見た時自分の保育はどうなのかと考えることで自分の保育も変わっていくと思う。
		18	遊びを客観的に見ると、奥の方で自ら遊びを展開させている子がいたり、すみっこで保育者の話をちゃんと聞けていない子がいたり遊びの輪の中にいると気付けないことに気付けた。
		19	幼児と先生を客観的に見ると、先に起こる事を予想できたりして楽しかった。
		20	遊びを第三者の位置から見ると、ただ楽しいか面白いとも思うのではなく、保育者のねがいやどういふふうなところにあるのか、あれはどんなねがいをもってやっているのだろうと考えることができ、良い点も悪い点も見え、客観的に見ることも大切だなと思った。
		21	ドッチボールをやっている、中にいると全体を見ることはできず、外から見ていたからこそボールにふれていない子、逃げているかいないかもわからないような子を見つけました。
		22	見ている側の方が全体的に見れて、保育者として実践を行なっている人が気づいていない所まで気づくことができ、自分自身にも勉強になった。
		23	外から遊びを見ることで、客観的に保育者のねらいを見ることができ、「この遊びではこのねらいが伝えられる」とか「流れがと切れてしまった」とか細かい部分まで見て感じることができました。
		24	子どもがすごく良い遊びをしていたり、工夫している姿が見られましたが、先生がそれに気付いていなかったのも、何事もないままおわってしまっていました。
		25	ねがいや5領域は全て達成できているか、時間配分や援助の仕方は適当であるかなど、様々な視点から遊びの様子を見ることができ、とてもためになりました。
		26	環境も外側から見られるので、「あそこであれば子どもの興味を引く」などそういう所も学ぶことができた。
		27	もしあの時、先生が声をかけてあげられていれば、その子の自信になったり、他の子への刺激になって、何か違っていたのかもかもしれないと思うので、子どもを見て、気付ける先生になりたいと思いました。
		28	子どもたちが遊んでいる様子を見て、「このまま自由遊びをもう少し続けよう」などその場での対応も重要だと思いました。
		29	子どもの動き、保育者の動きを見ていると必ずしも、指導案通りに全てをこなすだけが良いというわけではないと思った。

特に「人の実践をみて自分が少し成長できたと思った（文4）」「自分たちの実践をより良くするためにたくさん良いところを盗もうとして、それが良い学びとなっていました（文11）」と述べられているように、学生は他者の実践をただ見ているのではなく、保育者の立場で実践を観察していることがわかった。これは、「外から見たとき自分の保育はどうなのかと考えることで自分の保育も変わっていくと思う（文17）」という記述にもあるように他者の実践を見ることでも、自分の保育を考える有益な機会になっていたものと思われる。

#### IV. まとめ

本研究では、先生役、幼児役、観察役を経験する模擬保育を取り入れた健康系授業を受講した学生の自由記述を対象に、テキストマイニング分析を用いて「先生役、幼児役、観察役の学びの傾向」を読み取ることで、授業での模擬保育実践の実態及び今後の改善を行うための知見を得ることを目的とした。

その結果、先生役、幼児役、観察役に関する学びの傾向について以下の内容を読み取ることができた。

- 1) 先生役は、「遊び」というキーワードと共に12語が抽出された。この語を含めた記述からは、「子どもに合わせた遊びを考えること」「保育者の役割に関すること」「子どもの主体性、子ども中心に遊びを展開、発展させること」「自由に遊ぶ時間を設定すること」「保育者が子どもの遊びを阻害してしまうこと」「保育者の遊びの説明に関すること」に関連する学びの傾向が読み取れた。
- 2) 幼児役は、「子ども」というキーワードと共に8語が抽出された。記述からは、「子どもの目線」「子どもの気持ち」を想像しながら実践に参加し、「保育者の遊びの説明に関すること」「自由に遊ぶ時間を設定すること」「子どもの興味・関心を引き出すこと」「保育者の役割、在り方、関わり方に関すること」といった保育者の立場から学びの傾向が読み取れた。
- 3) 観察役は、「見る」というキーワードと共に13語が抽出された。記述からは、実践を外から冷静に観ながら、「先生役、幼児役の動きに関すること」「保育者の意図や遊びの環境、展開に関すること」「他者の実践から見ての気づき、学びに関すること」についての学びの傾向が読み取れた。

これらの結果より、先生役では「遊び」、幼児役では「子ども」、観察役では「見る」と各立場から抽出されたキーワードは異なるが、学生の記述からは、それぞれの立場で経験したことを関連させて学んでいく傾向があるように思われる。

また、観察役の記述から読み取れた冷静に実践を観ていくことは、様々な情報を集約しながら、保育を展開していかなければならない現場において、実践内に入ると観えにくい部分を捉える点で効果的であると考えられる。このことから、今後は、授業において、観察役での経験は現行の1回から3、4回までに増やし、「観ることで学ぶ」機会を増化させることを検討していきたい。ただし、その際の「どこを観るのか」といった指導教員のアドバイスや見る視点の明確化も同時に図っていく必要があるといえる。

## V. 今後の課題

本研究では、先生役、幼児役、観察役の文章記述から各役割の特徴を述べるに留まった。そのため、今後は、先生役、幼児役、観察役の共通的なキーワードに着目し、比較を行い、共通して学べる内容や各役割で特徴的に学べる内容を明らかにしていくことが課題である。また、今回のキーワードや文章抽出は、中心的な「学生の学びの傾向」を読み取るのみであった。今後は、共起ネットワークに示されている周辺のキーワードに着目して、より詳細に「学生の学び」を読み取っていく必要がある。

## VI. 引用文献

- 文部科学省（2017）教育課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（第5回）配布資料  
教育課程コアカリキュラム（案）：資料3-2, 5-7
- 松山由美子（2009）保育者養成における「保育実践力」育成のための学びの場－模擬保育と学外実習に関する質問紙調査の結果からの考察－：四天王寺大学紀要(49), 197-212.
- 中山忠政・上田慎二（2013）効果的な「保育実習指導」に関する研究－事前指導における部分保育案作成の試み－：プール学院大学研究紀要 54, 275-284.
- 上村晶（2013）保育者養成における保育実践力の向上に関する一考察（2）：高田短期大学紀要 31, 79-88.
- 富貴田智子・青山佳代・森山雅子・笹瀬ひと美（2017）保育に対する学生の認識の変化：模擬保育を通じた保育観・子ども観の形成：愛知江南短期大学紀要(46), 23-34.
- 上村晶（2010）実習事前指導における模擬保育ビデオを活用下カンファレンスの実際と効果：高田短期大学紀要 28, 89-100.
- 笠原正洋・吉川寿美（2016）保育内容「人間関係」の模擬保育実践において活動の枠組みモデルが実演者・参観者の学びに及ぼす効果：中村学園大学発達支援センター研究紀要(7), 89-95.
- 角南良幸・高原和子・本山貢（2017）小学校教員養成課程の体育科における模擬授業の効果～テキストマイングによる自由記述形式の回答文に対する検討～：福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学 3, 69-75.
- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して：ナカニシヤ出版, p157